

# 東京古田会ニュース

— 古田武彦と古代史を研究する会 — No.218 Sep.2024

<http://tokyo-furutakai.com/>

e-Mail: [saitaka7078@yahoo.co.jp](mailto:saitaka7078@yahoo.co.jp)

代 表: 安彦 克己

編集発行: 事務局 〒212-0024 川崎市幸区塚越 3-370 斎藤 隆雄 TEL/FAX 044-522-7500

郵便振替口座 00110-1-93080

年会費 4千円

口座名義 古田武彦と古代史を研究する会

## 目次

\*大宮姫伝承を訪ねて その二  
東久留米市 村田智加子……①

\*唐書類の読み方 古田武彦氏の  
『九州王朝の歴史学』〈新唐書日本伝  
の資料批判〉について  
世田谷区 國枝 浩……④

\*古代史エッセー 81  
倭国と日本国の関係  
日野市 橘高 修……⑧

\*和田家文書  
『金光上人史料』の真実  
京都市 古賀達也……⑨

\*和田家文書備忘録 8  
金寶壽鍛造の刀  
東京都港区 安彦克己……⑬

\*「東京古田会」月例会報告⑦  
6月度(6月29日)  
7月度(7月27日)  
文責: 新保 高之……⑮

\*お知らせ  
・月例会のご案内 ……⑯  
・東日流の旅へのお誘い ……⑦

## 大宮姫伝承を訪ねて その二 東久留米市 村田智加子

六月の古田会例会で『大宮姫伝承を訪ねて』の旅行記を報告しました。読めばわかる旅行記をどのようにお話したらよいのか思い悩み、もう一度旅行先で頂いたパンフレットや地図、指宿商工会議所発行の「指宿まるごと博物館ガイドブック」『いぶすき検定』公式本を見直しました。

そして、旅行記を書いた時には気がつかず見落としていたことがあることがわかり、それについて思ったことも含め次の三点について月例会でお話ししました。

- 1・「児ヶ水」という地名について
- 2・「揖宿神社」の由来
- 3・豊玉姫について

月例会では写真を見ながら私のメモを中心にお話したので、今回の報告も大宮姫伝承についての報告の一つとして文章化して残しておきたいと思いました。パンフレットに書いてあることやガイドブックに書かれたことの新たに気づいたことの紹介、それについて私が考えたことが中心の報告になります。独断、妄想も含めての旅行記ですのでご容赦ください。

### 1. 「児ヶ水」の地名

『ガイドブック』では「児ヶ水」(ちよがみず)という地名は山川の小字として紹介しています。この「ちよがみず」という変わった地名はどうして出来たか二つの説が紹介されていました。

① 「柳田國男は『地名の研究』中で『薩摩の海門岳の南麓にも児水(ちよがみず)という清水によって地名を得た村があつて、之を岡児水・浜児水の2区に分かつている』と述べている」

② もうひとつの説は伝承なのか、誰かが言ったかわかりませんが「貴人に稚児が水を差し出したところから来たという説がある」この②の説に対して「しかし」と否定する形で柳田の説が出されているので一般的には柳田國男の説が通っているのだと思います。

私はこの部分を読んで次のような疑問を持ちました。

⑦ 柳田國男は「地名の研究」の中で二ヶ所でこの「児ヶ水」について触れています。一ヶ所は前述の部分。もう一つは、分村についての所です。古い時代、一つの郷はかなり広く、分村するのに東西南北・上中下そして浜と岡などに分けた例として岡児ヶ水、

あったら村の地名になるという事はあり得るかもしれないと思いました。

① 村の大きさについての疑問です。海門・岳南麓に児ヶ水という清水があったとすると、今、地図上に見る「山川浜児ヶ水」を含めた一帯を一つの村にするにはいくら古い時代に一つの郷が大きかったとしても広すぎるのではないかと思います。

② もう一つは疑問ではありません

以上のことから児ケ水という地名は大宮姫伝承を秘めた地名のように思えます。柳田國男の言うように「児ケ水」という清水によって名を得た村があるのなら「児ケ水」と名が残った理由は第二説にあるのではないかと思いました。

社記によれば天智天皇が薩摩地方を巡った時、当地に滞在したこと、その由来の地として慶雲三年（706年）天皇の神霊と遺器をいつき奉つて葛城宮が創建されたとありました。葛城宮といえば、葛城の皇子と言われた天智天皇のことではないか、今は揖宿神社の摂社の一つ、西之宮に天智天皇が祀られています。この神社の創建時は天智の名を冠した宮として創建されたという記録があることがわかりました。創建の慶雲三年（706年）は枚聞神社の開闢古事縁起によれば天智天皇の亡くなった年です。

開聞岳は九州の中の最も新しい火



山で、縄文後期の噴火に始まります。そのため山の浸食が進んでおらず美しい円錐形をしています。七世紀後半にも噴火が起きていますが、貞観十六年(874年)七月の噴火はその倍以上の激しい噴火だったようです。その頃、開聞九社大明神と言われていた開聞神社(枚聞神社)の神は「葛城宮に避難したい」と神託を出したので、その年の十一月、葛城宮といわれていた神社は開聞新宮九社大明神と称するようになったとのこと。その後約千年、地域の氏神として「シングーサー」の愛称で親しまれてきたそうですが明治維新後、揖宿神社と名称変更され現在に至っています。九社というのは天照大神と素戔鳴尊の誓いによって生まれた五人の皇子



と三人の姫皇子の八人、そして天照大神の九人の皇祖神を祀る社です。この開聞神社と揖宿神社は密接なつながりのある本家と新宅のような関係のまま千年という時が流れたのでしよう。神社の森の巨大楠は歴史の証人だと思われず。

揖宿神社の宝物殿に唐銅製の花瓶が伝わり「天智天皇が志賀の都よりお持ちになった」との伝承があるようですが、昭和二十九年の薩摩古美術展に出品された折に鑑定されて、この花瓶は室町初期から中期のシナ・朝鮮より来た物だろうと言われています。今日の進んだ鑑定技術でもう一度調べ直したらどうなるのだろうかと思いました。

### 3. 豊玉姫について

豊玉姫とは海神の娘で、兄の釣針を無くしてしまった山幸彦が海の中に探しに行つて出会い、その後結婚して(うがやふきあえず)を生み、その子神武天皇が大和朝廷の始祖となったという伝説の姫です。

ガイドブックにこの豊玉姫の話が載っています。ガイドブックからその場面を拾い出してみました。

① 豊玉姫が童宮城から開聞に向かうために上陸したのが「無瀬浜」。大宮姫の伝承では志賀の都から

伊勢を経て船で生まれ故郷の鹿児島へ上陸したのが「牟瀬浜」。「牟」が「無」に変わっただけの同じ浜ですが「無」という文字が使われているのが面白いと思います。

② 亀割坂はその昔、豊玉姫が千年甕を枚聞神社に運ぶ時割れた場所。一説としてこの甕は大宮姫が京都から運んできたものと言われ、るとも書かれています。

③ 開聞十町京田に残る「玉の井」と言われる井戸は豊玉姫が化粧に使った井戸と言い伝えられています。縁起によれば十町京田は大宮姫の仮殿が置かれた場所です。

④ 長崎鼻に残る豊玉姫について。長崎鼻は薩摩半島最南端の景勝地ですが、そこに童宮神社があり豊玉姫を祀っています。現在の社殿は平成二十三年完成の童宮城のような神社で縁結びの神社として人気があります。

明治四十四年「山川郷土歴史」の本の中に「神体石祠にて豊玉姫を祭祠す。上代より人民村中の私立。南岸絶景で字龍宮鼻あるいは長崎鼻と呼ばれていた。」とありますがただ、ガイドブックでは次のことも書き添えています。「しかし、長崎鼻には古くから伝わる童宮伝説はない(開聞岳一帯がかつて童

宮界だったとの伝承あり)。

このガイドブックに残る豊玉姫の場面①③④はまるまる大宮姫とかぶっています。④では長崎鼻には古くから神社(ほころう)がありました、この土地に童宮伝説が無いならば村人たちが私財を使つて上代より守ってきたのは何なのでしょう。

⑤ 知覧に立派な豊玉姫神社があり、少し離れた所に豊玉姫の墓があり



知覧町 豊玉姫陵

ります。知覧には豊玉姫にまつわる伝説が多く残されているそう、この豊玉姫神社は村の鎮守の神様として、毎年八十八夜には新茶が奉納されるそうです。

長崎鼻にも童宮神社があったので伝説の姫であっても神社があることはわかりますが、墓があるというのは何だろうと不思議に思いました。墓の前に次のような説明版がありました。

「以前は木が生い繁り小さな林のようになっていました。そこは鍬も入れてはならない場所でした。そのため耕地整理が行われたときも、そのまま残されました。森山信仰と豊玉姫伝説が結びついたものでしょうか。」

私はこの墓は大宮姫の墓ではないかと考えました。縁起によれば大宮姫は開聞大神ですから、和銅元年(708年)創建の枚聞神社に当初は祀られていたと考えるのが自然です。大宮姫の亡くなった年です。枚聞神社に葬られていたかもしれないと思います。

けれどもかなり早い段階で祭神は大和朝廷の祖先神に変わり、開聞岳の噴火によつて神社も変わったたりして、今の枚聞神社には大宮姫の痕跡は何もないと思われます。知覧に残る豊玉姫の墓も実際に葬ったものではな

いとも思います。

度重なる大和との戦いで隼人の力は衰えており、御陵と言われるような立派なものは造れなかったのではないか、又は大宮姫の墓とわかるのは都合悪かったか、全く居なかった姫と思わせたかったのか、知覧に残る寂寂とした畑の中の、古びた鳥居とさほど広くない石囲いの中の草地を見て大宮姫の置かれた状況を想像しました。

この鹿児島旅行のあと、国東半島を巡る和田家文書の旅で皆と多少外れて友人と宇佐市に残るハトメの墓を訪ねました。養老四年(720年)大和朝廷の要請で隼人を滅ぼす戦いの先頭に立った宇佐神宮の女禰宜ハトメです。本には畑の中にあると書かれていましたが、今は駐車場の中にさほど大きくも古くもない石垣に囲まれて三基の石塔がたっています。近畿の天皇陵のように塚ではなく石に囲まれた敷地にあるハトメの墓は広く言えば豊玉姫と同時代の墓のように思えました。

ただ、ハトメの墓と豊玉姫の墓を比べるならば、豊玉姫の墓の方がずっと人々に大切にされ守られてきた墓のように思えました。

以上人から人に伝えられた大宮姫のかすかな痕跡に触れることができ

て宝物探しのような楽しい旅を満喫できたこと、報告できたことに感謝いたします。

### 唐書類の読み方

古田武彦氏の『九州王朝の歴史学』〈新唐書日本伝の資料批判〉について

世田谷区 國枝 浩

私は、古田氏の多元史観を支持して古田古代史学から多くを学んできた。中国の史書に記載された倭国は九州に存在した。これがすべての始まりであった。

しかし氏から学ぶ中で、幾つかの、あるいは幾つもの疑問が浮かんでいくことも事実である。古田古代史学の発展を願う立場から、通説やそれに基づく教科書の見解への懐疑を強める意味で、これから幾つかのことを論じておきたい。

今回は主に東京古田会における十月の学習会で取り上げられることになった『九州王朝の歴史学』第四篇〈新唐書の史料価値〉などに焦点を当てる。古田氏議論について疑問点、それは時には氏の学説の中での「自己矛盾」として、また時には論証上の不備という形で現れてきている。こ

れらは古田古代史学の発展のために、取り除かれなければならないのではないかと考えている。今後、活発な議論に進むことを期待し、その問題提起として本稿を書くことにした次第である。また、古田氏を支持する研究者の中に、安易にとも思える形で古田氏の不十分と思われる学説や立論に依拠している論考が見受けられるので、特に必要な議論だと考えている。後者の具体的な問題点については別稿で述べることにする。ここでは古田氏の議論に関わる問題点に焦点を絞る。

ところで『九州王朝の歴史学』は当初、駈々堂から出版され、後にミネルヴァ書房から出版された。本稿で示されている頁数は、資料参照の便宜上、両出版社ともに記してある。駈々堂1991年第一刷発行のものをまず示し、カッコ内にミネルヴァ書房2013年初版のものを示す。

### 1節 『旧唐書』〈日本国伝〉の「或曰倭国自惡其名改為日本」

古田氏は、『旧唐書』〈日本国伝〉における「或曰倭国自惡其名改為日本」、つまり「倭国自身が日本国と改号した」の意味を論じている。そして、ここに書かれた文の主語「倭国」が『旧唐書』〈倭国伝〉における倭国であると述べている。氏の頭の中には当然、「九州倭国」のことが念頭にある。

『旧唐書』〈倭国伝〉の倭国だと明言しているからだ(注1)。

この議論では、まず前提がおかしい。確かにこの文の主語は「倭国」である。しかし、〈日本国伝〉に九州倭国の人間が登場して発言をすることはない。また、倭国の人間を参考人として召喚したという様子も記述されていない。あくまでも、〈日本伝〉の「曰う、言う、云う」の発言主体は日本人である。だから氏も言う。これらは「栗田真人、阿部仲麿、空海」などの日本国側の人間の証言だとしている(注2)。

(注1)『九州王朝の歴史学』 第四篇二 121～123頁(101～102頁)

(注2)同上書 第四篇一 128頁(106頁)。さらに、『失われた九州王朝』第四章『旧唐書』の史料価値 ミネルヴァ2010年初版314頁では犬上三田相の名前もあがっている。「推古朝の遣使者と言われる三田相」が咸亨元年以後の唐書類の証人にはなれない。ここでは不可解な点を指摘するだけにとどめる。

ということとは、とても奇妙な状況が起ころ。証言者であるヤマト王権の日本人が「倭の名が雅でないので、九州王朝の人が自分たちで倭を日本の名に替えたのです」と「曰う」ことになる。そうすると、これは次の二つのことを意味する。

① ヤマト王権の人間が、九州倭国

が近畿ヤマトとは別に存在していたことを承認する。これはどんな事態だろうか。また、

② 日本という雅な名に替えた「功績」を九州倭国に譲るのか。

この①②の問題は議論されなければならないだろう。

問題の所在はどこにあるのか。日本人が「曰う」言葉の中に「倭国が自ら名を改めた」というときの「倭国」は、ヤマト王権の人間が倭国を僭称して「曰っている」と解釈するしかない。「私たちの元の名が倭国であり、自分たちで倭国から日本に名を変えただけ」という主張になっていた、とつまり、この「倭国」は九州倭国の僭称であり、ヤマトの王権による倭国の名の篡奪に他ならない。

言いかえると、この発言の時点におけるヤマト王権の立場は「倭国と日本国は別種」という「多元史観」の立場から、倭国も昔から我々のことという「一元史観」の立場へと変更されていることを意味しているということである（注）。

（注）「ヤマト王権の多元史観から一元史観への転換」についての詳細は、拙稿「日本国の初の中国遣使は咸亨元年である」東京古田会会報217号で述べている。

## 2節『新唐書』の資料批判の内容

『九州王朝の歴史学』では、かなりの部分はその否定的側面が論じられている。『新唐書』の資料批判としては、まず誤字・誤植の多さを氏は挙げている。氏はこの論考では、「次用明亦曰目多利思比（北）孤直隋開皇末始與中國通」の「目」を誤字・誤植の類で片付けようとしている（注）。つまり、「目」を不要のものととして、「目」を「無視」する。これは古田氏の嫌った「文字改定」の一種に他ならないのではないのか。「目」を含めてこの文章の意味を解釈する必要はないのだろうか。この「目多利思比孤」の訳出上の問題点は次の3節でも述べる。

そこから氏は、天皇名の誤植として孝安が天安、敏達が海達、推古が雄古と記述されていることなどを挙げている。確かに、氏が挙げた以外にも持統が總持と書かれた事例などもある。

（注）以上、『九州王朝の歴史学』第四篇七 156頁（131頁）の「目多利思比孤」に「注17」が付され、その「注17」が166頁（140頁）にある。その「注17」で「目」が氏によって誤植と疑われている。

まず、誤字・誤植の問題は『新唐書』の責任だとはつきりと述べることはできない。『新唐書』に記された天皇

名は漢風諡号である。唐は、国交関係のない時代の天皇名については、淡海三船の創作した漢風諡号を760年代以降に一律に知らされたのである。直接に交流のない天皇名に中国が強い関心を持つとは思えない。

仮に文字が違っているとしても、「そんな名前の天皇がいたのか」で済まされてしまいうだろう。人名の文字が違っていたとしても、面識もない人間の名である。誤字があっても文の意味は了解できるからである。このことにより、誤字が史書に残ってしまうという場合も起こるだろう。あるいは、書写の段階で書き誤ったという可能性もある。単純に唐の側の責任とは決めつけることはできない。

むしろ、日本の古代史研究者の間で中国の史書は不正確であるという不信感がうまれた一つの大きな要因は、『新唐書』における天皇名の誤字・誤植の問題があった可能性がある。

その結果、例えば『魏志』の「南」は「東」の間違いだろう、などの文字改定の風潮も日本の学界の中に創られてきた。氏はこれと変わらない態度に陥ってしまったのか。

そして、ひよつとすると、氏は「目」を無視してしまう解釈にあまり自信が持てないために、「目」の誤植の可能性を「本文」ではなく「注」の中で目立たないように指摘したのだろう

か。いずれにしても氏はこの論考では「目」があることが不都合だと思っただけであろう。『九州王朝の歴史学』では「目」を解釈しないで済ませている。

私は別稿で「目」を無視しないで、それを「目する・見なす」と読み解釈する案を提出した（注）。文字改定をしないで史資料を解釈する、これは古田氏から学んだ方法である。

（注）國枝フログ：常識への懷疑「用明、目多利思比孤の読みと意味」

## 3節 古田氏の自説変更問題

一般に、自説を変えるということとは起こりうるだろう。研究の進展によって、前説を撤回し新たな説を打ち出だす。研究の前進のためには必要なことでさえある。しかし、新説を展開するときにはその大前提として、まず旧説撤回を表明する、そして次に旧説撤回の根拠が述べられなくてはならないだろう。

しかし古田氏の場合には、①旧説を変更するときに新説を打ち出す表明をした上で、その理由を示しつつ新説の展開をするときもあるが、②旧説変更についての表明がなく、その理由も述べられないまま新説が展開されることがある。

例えば、推古紀の「遣隋使があつた」



(旧説)が撤回され、「遣隋使ではなく遣唐使があった」(新説)が唱えられたときは①に当たる。これに対して、「東鯤人が居たのは銅鑼圈」(旧説)から「東鯤人が居たのは九州南部の太平洋側」(新説)に変更したときには何の説明もなかった。②にあたる。先の2節における「目」の扱いは②「旧説変更の表明なし・変更理由の明示なし」、のもう一つの例であった。

#### 4節 「日本が倭国を併せる」と「日本を倭が併せる」

古田氏は、『九州王朝の歴史学』第四篇六で『旧唐書』の「小国の日本が倭国を併せる」と『新唐書』の「日本を倭が併せる」という相矛盾した記述(以下、4節の矛盾と呼ぶ)をどう解釈するのかについて論じている。同書149～150頁(125～130頁)において、古田氏は、倭を『旧唐書』『日本が倭国を併せる』では「チクシ」と読むのに対して、『新唐書』『日本を倭が併せる』では倭を「ヤマト」と読んで4節の矛盾を回避しようとする。

まず、再度確認したいことは(日本(国)伝は全体的にインタビュー記事である。発言者は誰か。『旧唐書』では日本人、『新唐書』では日本人だ。どちらもヤマト王権側の人間で

ある。ヤマト側の人間は、倭が「チクシ」だという考えを持つはずはない。さらに、別の問題がある。聞き手、また書き手は唐である。唐が和語、言いかえると訓読みの「ヤマト」と「チクシ」の区別を意識するはずもない。倭は唐の漢語読みで「ワ」であろう。唐がもし「ヤマト」や「チクシ」と聞きそれらを記述するなら、『隋書』にも載る例えば、「耶摩臺」、「竹斯」などのようにそれぞれ書くはずだ。つまり、日本(国)人の側であれ唐の側であれ古田氏の挙げる意味と読みの区別をするはずはないのである。

#### 5節 4節の矛盾は解決していない

さらに氏の4節の矛盾の解決法からは別の問題が生じる。氏の解釈による『新唐書』の日本人の発言内容には意味がない。『新唐書』の「日本を倭が併せる」を氏の述べた通りに訳して読むと、「倭(ヤマト)が日本(ヤマト)を併せる(ヤマトがヤマトを併せる)」となってしまう。同語反復である。この無意味さについて氏は考慮していない。これでは4節の矛盾はやはり解決していない。

#### 6節 4節の矛盾は唐の側の責任か

谷本茂氏も『古代に真実を求めて』

二十七集で、この4節の矛盾を解決しようとして別の形で挑戦したが、成功したとは言えない(注)。古田氏、谷本氏を含む多くの論者は、両唐書の(日本(国)伝に4節の矛盾があることを「あつてはならない」、つまり否定的な問題だと考えることに起因する難問に直面してしまったと思われる。ある研究者はこの4節の矛盾を唐の側にその責任があると捉え、また他の研究者は唐書類の読み方の問題に帰着させようとする。

両唐書間に見える矛盾は、日本(国)人の発言を唐が率直に記述した、その中に矛盾はあったのである。言いかえると、様々な日本(国)人の発言間にあつた矛盾なのではないだろうか。「亦曰」、「中国疑う」などが記述されていることを適切に評価しなくてはならないだろう。「何が語られ、何が疑われたのか」が問われている。(注) 詳細は拙論「唐書類の読み方 谷本茂氏の幾つかの問題提起について 谷本茂氏との対話のために」で論じる。

#### 7節 『新唐書』に(倭(国)伝が無理由

古田氏は言う。『新唐書』に「倭(国)伝」が存在しないのは倭国が『新唐書』の記載された北宋の時代に存在していなかったからだと述べる。あるいは

はこうも言う。『旧唐書』は「歴史性(唐の時代の前半)」を重んじたのに対して、『新唐書』は「現代性(唐の時代の後半以降)」を重視したことによる、と(注)。

(注)『九州王朝の歴史学』第四篇 五 146～149頁(119～124頁)

確かに『新唐書』が書かれた北宋の時代にはすでに倭国は存在していなかった。しかし、氏の指摘は正しかったであろうか。もし氏の指摘が正しいとする。それでは、『新唐書』(東夷伝に(高麗伝)や(百濟伝)があるのは何故か。説明がつかなくなる。高麗や百濟は、倭国と同じような時代には滅びていた。しかも高麗の後継国である渤海もすでに(渤海伝)に記されている。それにもかかわらず、(高麗伝)はある。だから、なぜ『新唐書』に(倭国伝)が存在しないのかについての氏の説明に納得できるものではない。

なぜ、(倭(国)伝)はないのか。ここには別の要因がありそう。つまり、日本国は強固に主張し続けた。「中国の史書に記載されていた倭国は我々だ、それが今の日本国だ。(日本伝)があれば(倭国伝)は不要だ。『倭国と日本を併記するような不体裁なこと』はしないほしい、と。それが『新唐書』に(倭(国)伝)が記載

されなかった理由であろう。私の推理推測である。

## 8節 〈日本伝〉が『日本書紀』の立場で書かれている理由

古田氏は〈日本伝〉が古事記、日本書紀の記した「近畿天皇家中心史観にたつ歴史を反映している」、と指摘する(注1)。この点が古田氏のこの論考におけるハイライトである。素晴らしい指摘である。『新唐書』は「日本国の正史の立場を容認した」ため、偽証の責めを、国土の広さ問題に局限したとも言う(注2)。

(注1)『九州王朝の歴史学』第四篇八 159(134頁)。

(注2)『九州王朝の歴史学』第四篇九 161(135頁)。

他の多くの論者とは違って、「情をもつてせず、ゆえにこれを疑う、また妄りに誇る」、この点を氏は、ある程度は、重視している。唐は疑わしい日本国の主張や立場を無碍に否定することなく、しかし「疑い」については決して撤回しなかった。古田氏による唐の苦悩を見事にとらえた表現であるといえるだろう。したがって、氏はもちろん唐が『日本書紀』に表現された日本国の立場が歴史の真理を語っている」と認識したわけでは決して

ない。終結は唐と日本国との一種の政治的決着、政治的妥協に終わったのであろう。

そうであるならば、古田氏は最初から唐が日本(国)人の発言に疑いを持っていたことから唐書類を考察しなければならなかったのではないだろうか。1節の『旧唐書』〈日本国伝〉の「或曰倭国自惠其名改為日本」に戻る。

『旧唐書』〈日本国伝〉の「倭国が自ら日本国に名を変えた」なども「亦曰」を見逃さないで、日本人による発言であったこと、そして日本人の発言がことごとく疑われていたものという視点から理解されなければならなかったはずである。しかし、氏はこの一文を歴史の真理であると受け止めてしまったのである。氏は解釈の視点が定まっていなかったのではないだろうか。

## 9節 本稿を終えるにあたって

『九州王朝の歴史学』第四篇〈新唐書日本伝の資料批判〉は次の言葉で始まっている。「日本古代史学には、二つの道が存在する。一は古事記・日本書紀の描く古代日本像を基盤にし、外国の史書に対して批判的に取捨する方法論に立つ。一は、外国史書の記述するところを基本にし、古事記・日

本書紀に対して批判的に検討する。この方法論である。」そして、前者の立場を「主観主義」、後者の立場を「客観主義」と呼び、氏は「後者、客観主義の立場に立つ」と述べている(注)。(注)以上、同書117～118頁(97頁)

日本の外交史に関する限りにおいて、私の立場はこの氏の立場を受け継いでいる。私は、中国の史書が常に客観的で正確であると断言するわけではないが、より客観的と思われる中国の史書に依拠して議論したい。古田氏も客観的と自ら述べた外国の史書、『新唐書』にもっと強く寄り添って解釈を進めるべきではなかったのか、と惜しまれてならない。

天皇名に見られる誤字・誤植の指摘、文字改定と思われる「目」の無視、また中国人には区別のしようもない「倭」の訓読み(「チクシ」と「ヤマト」)を持ち出す。それらを論じ、展開する必要はなかったであろう。

『旧唐書』〈日本国伝〉、『新唐書』〈日本伝〉は基本的には、日本(国)人に対するインタビュー記事であり、日本(国)人が「曰ったこと、言ったこと、云ったこと」が唐によって「疑われている、実がないと思われる、妄りに誇っていると感じられている」、これがキーワードなのではないだろうか。

## 『和田家文書』をみちづれに

東日流の旅へのお誘い!!

期日 令和六年十一月二十七日(水)

二十九日(金) 2泊3日

費用(概算) 67,500円+(航空券代23,000円+34,500円)

◆一日目 羽田空港七時二十分集合

羽田空港七時四十分出発(青森空港

バス利用・古代の聖地「山風森の男神

女神」・砂沢遺跡・石神遺跡・天皇山・

高倉神社・深浦・不老不死温泉(宿泊)

◆二日目

日和山(ひよりやま)と夕日海岸から

阿部比羅夫水軍との「大海戦」の古戦

場を望む・見入山観音堂(安倍一族の

財宝が埋められた地)・石神神社と語

利集落(語部帯川一族の郷)・亀ヶ岡・

中の島「歴史民俗資料館」・うまの浜

「比羅夫と北ワケグラ王が和解の宴

会を開催した浜」・神明社(御世堂塚

の安倍神社・昆布掛邑(語部宮川家の

郷)・豊富町(語部鈴木家の郷)・高森

(大型安東船の造船所)・藤枝(語部

金田一家の郷)・中派立(語部大丸屋

の郷)・稲垣・稲垣温泉ホテル

◆三日目

聖地石塔山「津保化(ツボケ)族、荒

覇吐(アラハバキ)族、修験宗、歴代

日本將軍の墓地」として二重、三重ど

ころか四重に重なる聖地訪問・立佞

武多の館・板柳町(邪馬壹国の「ヒミ

力」関係遺跡・青森空港十八時発予定

古代史エッセー 81  
倭国と日本国の関係

日野市 橋高 修

【旧唐書と新唐書の記述】

旧唐書と新唐書には倭国から日本国への過渡期に派遣された遣唐使の発言が記述されている。使者の発言として、日本国と言う名前の由来、日本国と倭国の大小・併合関係、日本国の支配領域などが記されている。

旧唐書も新唐書も漢文で書かれているので、まず漢文の翻訳が正確でなければならぬ。それほど難しい構文ではないが、記されている内容が少し入り組んでいるために糸がついてしまいそうな文章になっている。そのため従来の研究者たちによる様々な解釈によって混乱に拍車を加えてしまったのかもしれない。

ここでは遣唐使の発言が史実を反映していることを前提に考えて、もつれた糸をほどくためにできるだけの整理を試みようと思う。

【内容の区分】

両書に記されていることは以下の五つに分けることができる。

- (Ⅰ) 倭国と日本国は別の国
- (Ⅱ) 倭国が日本国に名前を変えた
- (Ⅲ) 倭国の分流が日本国を建国
- (Ⅳ) 旧小国の日本国が倭国を併合
- (Ⅴ) 倭国が小国の日本国を併合

【旧唐書日本国伝】読み下し文は岩波版

「日本国者倭国之別種也。(日本国は倭国の別種なり。)(Ⅰ)・(Ⅲ)

「以其国在日辺、故以日本為名。(その国日辺にあるを以て、故に日本を以て名となす。)(Ⅱ)

以上が遣唐使の発言を聞いて旧唐書の編者が記したことである。

「或曰、倭国自惡其名不雅、改為日本。(あるいは倭国自らその名の雅ならざるを惡み、改めて日本となす。)(Ⅱ)

「或云、日本舊小国、併倭国之地。(あるいは云、日本は旧小国、倭国の地を併せたり。)(Ⅰ)・(Ⅳ)

ここは日本国からの使者の発言を紹介している部分。

旧唐書には(Ⅴ)は記されていない。【新唐書日本伝】現代語は拙訳

「咸亨元年遣使賀平高麗後稍習夏音惡倭名更號(咸亨元年(670)、遣使して高麗を平定したことを祝賀した。後に稍夏音を習い倭の名を嫌い日本と号した。)(Ⅱ)

以上が日本からの使者の発言記録に基づいて来朝目的(賀平高麗)と国号変更のいきさつを新唐書の編者が記した部分である。

「日本使者自言國近日所出以為名(使者が自ら言うには国が日が出る所に近いので名前とした。)(Ⅱ)

號(或る人は日本は小国で倭が併合したため倭がその名前を名乗った。)(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅴ)

新唐書には(Ⅳ)が記されていない。

【続日本紀】の証言】現代語は拙訳

『続日本紀』文武天皇慶雲元年七月一日条に遣唐使粟田朝臣真人が帰朝した後に語った、楚州塩城県(現在の江蘇省塩城市)に上陸した時に出会った唐人との問答が記されている。

唐人から「何処使人(何処の国からの使人ですか?)と問われ、「日本国使(日本国から来た使いです。)」と返答している。粟田は唐が周と改称したことを知らなかった。天授元年(690)に則天武后の登位と国名の改称が行われているので、粟田が派遣されるまでの中国との交流は極めて限定的だったようだ。唐人は日本国のことは知らず、海東には「大倭国」という豊かで礼儀正しい君子国があると聞いているとした上で、粟田ら一行の人となりを見て大倭国の後継国の使者としてふさわしいと納得している。粟田は帰朝後、「倭国が豊かで礼儀正しい君子国」という言葉をそのまま報告しているので、日本国が倭国の後継王朝であることを認識しているようにも読み取ることができる。『続日本紀』の編者も粟田の認識を肯定しているので、そのまま記事にしていると考えられる。

【考察】

古田武彦氏は「新唐書の史料批判」『九州王朝の歴史学』所収、駸々堂版p146)の中で、旧唐書は「歴史性」を重んじ、新唐書は「現代性」を重んじている、と述べている。

旧唐書の記述を概略すると、倭国の別種で旧小国の日本国が倭国を併合した時に、「倭」の意味が雅でなく倭国よりも日辺に近いので日本と名乗った、ということになる。新唐書の記述は、倭国が小国の日本を併合した時に漢語では「倭」がよい意味でないことを知り、日が出るところに近い日本を併合したので日本を名乗ることになった、と読むことができる。

歴史性を重んじる旧唐書は、漢籍にも登場する歴史的な意味での倭国が元々は小国であった日本国に併合されたことを俯瞰的に述べ、現代性を重視する新唐書では、倭国は日本国を併合した後、「倭」が良い意味でないことを学び、(新唐書編纂時の)日本国を名乗った、と記している。前項では『続日本紀』が、「大倭国」という豊かで礼儀正しい君子国、と記述していることを述べた。大和朝廷となった日本国は、倭国に対して唐人が言うような意味での敬意を抱いていることになる。倭国の存在を全く無視している『日本書紀』とは別の事情があることをあらわしている。



## 和田家文書

### 「金光上人史料」の真実

京都市 古賀達也

#### 一、和田家文書群の分類

「東日流外三郡誌」を中心とする和田家文書研究のため、史料性格別に分類し、それに応じた史料批判が必要である(注①)。

##### 【和田家文書群の分類】

(α群) 和田末吉書写を中心とする明治写本群。「東日流外三郡誌」が相当する。紙は明治の末頃に流行した機械梳き和紙が主流(注②)。

(β群) 主に末吉の長男、長作による大正・昭和(戦前)写本群。明治・大正期に使用された大福帳の裏紙再利用が多い。

(γ群) 戦後作成の模写本。書写者は複数。紙は戦後のもの。厚めの紙が多く使用されており、薄墨などで古色処理が施されたものや故意に破ったものがある。和田喜八郎氏によれば、コーヒー等で着色を試みたとのこと。展示会用として外部に流出したものに见られる。新しい和紙に書かれたものも若干ある。

これらのなかで書写年代が比較的古いこともあって、α群に属する

「東日流外三郡誌」はもともと信頼性が高い史料と判断できるが、明治写本約二百冊が行方不明となっており筆跡研究が滞っている。他方、「東日流外三郡誌」よりも早い時期(昭和二十四年以降、注③)に世に出た和田家文書で、分類困難な史料群がある。金光上人史料だ。

#### 二、「金光上人史料」発見の経緯

和田家文書には金光上人(注④)に関する史料群があり、その一部は昭和二四年には五所川原市飯詰の和田家の近くにある大泉寺の住職、開米智鎧氏にわたっている(注⑤)。「東日流外三郡誌」(昭和五〇年『市浦村史資料編』として刊行開始)よりも早く世に出ていることから、昭和二二年夏に和田家天井裏に吊るしていた木箱が落下し、中に入っていた古文書に金光上人史料があつたようである。『飯詰村史』(注⑥)には、山中の洞窟から発見された役小角史料が収録されているが、その後、和田家文書中に金光上人史料が発見され、開米智鎧氏と佐藤堅瑞氏(青森県西津軽郡柏村・淨円寺住職)が調査した。開米智鎧『金光上人』(昭和三九年刊)には、当時の経緯が次のように紹介されている。

「昭和二十四年「役行者と其宗教」のテーマで、新発見の古文書整理中、偶然燭光を仰ぎ得ました。

行者の宗教、即修験宗の一分派なる、修験念仏宗と、浄土念仏宗との交渉中、描き出された金光の二字、初めは半信半疑で蒐集中、首尾一貫するものがありますので、遂に真剣に没頭するに至りました。

此の資料は、末徒が見聞に任せて、記録しましたもので、筆舌ともに縁のない野僧が、十年の歳月を閲して、拾ひ集めました断片を「金光上人」と題して、二三の先賢に諮りましたが、何れも黙殺の二字に終りました。(中略)

特に其の宗義宗旨に至つては、法華一乗の妙典と、浄土三部経の二大思潮を統撰して、而も祖匠法然に帰一するところ、全く独創の見があります。加之宗史未見の項目も見えます。

文体不整、唯缺と糊で、綴り合せた檻樓一片、訳文もあれば原文もあります。原文には、幾分難解と思はれる点も往々ありますが、原意を失害せんを恐れて、其の俣を掲載しました。要は新資料の提供にあります。」

『金光上人』に先だつて、佐藤氏が『金光上人の研究』(注⑦)を発刊した。氏は次のように当時を回顧して

いる。『古田史学会報』七号(一九九五年)より、要約転載する。

「『金光上人史料』発見のいきさつ

平成七年(一九九五)五月五日、わたしは青森県柏村の淨円寺を訪れた。和田家文書が公開された昭和二〇年代のことを知る人は今では殆どいなくなつたが、開米智鎧氏(飯詰・大泉寺住職)とともに金光上人史料を調査発表された淨円寺住職、佐藤堅瑞氏(インタビュール時、八十才)に当時のことを証言していただくためだ。

佐藤氏は昭和十二年より金光上人の研究を進め、昭和三五年には和田家史料などに基づき『金光上人の研究』を発刊した。また、青森県仏教会々長の要職も兼ねておられた。「正しいことの為には命を賭けてもかわないのですよ。金光上人もそうされたのだから」とインタビュールに応じていただいた。

「古賀」和田家文書との出会いや当時のことをお聞かせ下さい。

「佐藤」昭和二四年に洞窟から竹筒(経管)とか仏像が出て、すぐに五所川原で公開したのですが、借りて行つてそのまま返さない人もいましたし、行方不明になった遺物もありました。それから和田さんは貴重な資料が散逸するのを恐れて、ただ、いた

ずらに見せることを止められました。それ以来、来た人に「はい、どうぞ」と言っただけだったり、洞窟に案内したりすることはしなかったようです。それは仕方ないことです。当時のことを知っている人は和田さんの気持ちはよく判ります。

〔古賀〕和田家文書にある「末法念仏独明抄」には法華経方便品などが巧みに引用されており、法華経の意味が理解できていないと、素人ではできない引用方法ですね。

〔佐藤〕そうそう。だいたい、和田さんがいくら頭がいいか知らないが、金光上人が書いた「末法念仏独明抄」なんか名前は判っていたが、内容や巻数は誰も判らなかった。私は金光上人の研究を昭和十二年からやっていました。それこそ五十年以上になります。日本全国探し回ったけど判らなかつた。「末法念仏独明抄」一つとってみても、和田さんに書けるものではないですよ。

〔古賀〕内容も素晴らしいですからね。

〔佐藤〕素晴らしいですよ。私が一番最初に和田さんの金光上人関係資料を見たのは昭和三十一年のことでしたが、だいたい和田さんそのものが、当時、金光上人のことを知らなかつたですよ。

〔古賀〕御著書の『金光上人の研究』

で和田家史料を紹介されたのもその頃ですね(脱稿は昭和三十三年頃、発行は昭和三五年)。

〔佐藤〕そうそう。初めは和田さんは何も判らなかつた。飯詰の大泉寺さん(開米智鑑氏)が和田家史料の役小角(えんのおづぬ)の調査中に「金光」を見て、はっと驚いたんですね。それ

までは和田さんも知らなかつた。普通の浄土宗の僧侶も知らなかつた時代ですから。私も随分調べましたよ。お墓はあるのに実績が全く判らなかつた。そんな時代でしたから、和

田さんは金光上人が法然上人の直弟子だったなんて知らなかつたし、ましてや「末法念仏独明抄」のことなんか知っていないはずがない。学者でも書けるものではない。そういうものが七巻出てきたんです。

〔古賀〕思想的にも素晴らしい内容ですね。

〔佐藤〕こうした史料は金光上人の出身地の九州にもないですよ。

〔古賀〕最近気付いたことですが、和田家の金光上人史料に親鸞が出て来るんです。「綽空(しゃくくう)」という若い頃の名前です。

〔佐藤〕そうそう。

〔古賀〕親鸞は有名ですが、普通の人は綽空という名前は知らないですよ。ところで、昭和三十一年頃に初めて

和田家史料を見たということですが、

開米智鑑さんはもつと早いですね。

〔佐藤〕はい。あの方が一番早いんです。

〔古賀〕和田さんの話しでは、昭和二年夏に天井裏から文書が落ちてきて、その翌日に福士貞蔵さんらに見せたら、貴重な文書なので大事にしておこうと言われたそうです。

その後、近所の開米智鑑さんにも見せたということでした。開米さんは最初は役小角の史料を調査して、『飯詰村史』に掲載されていますね。

〔佐藤〕そうそう。それをやっていた

時に偶然に史料中に金光上人のことが記されているのが見つかったんです。「六尺三寸四十貫、人の三倍力持ち、人の三倍賢くて、阿呆じゃなからうかものもらい、朝から夜まで阿弥陀仏」という「阿呆歌」までがあったんです。日本中探しても誰も知らなかつたことです。それで昭和十二年

から金光上人のことを研究していた私が呼ばれたのです。開米さんとは親戚で仏教大学では先輩後輩の仲でしたから。「佐藤来い。こういうのが出て来たぞ」ということで行ったら、

とにかくびっくりしましたね。洞窟が発見されたのが、昭和二十四年七月でしたから、その後のことですね。

〔古賀〕開米さんは洞窟に入ったよう

ですね。

〔佐藤〕そうかも知れない。洞窟の扉

に書いてあった文字のことは教えてもらいました。

〔古賀〕佐藤さんが見た和田家文書はどのようなものですか。

〔佐藤〕淨円寺関係のものや金光上人関係のものです。

〔古賀〕量はどのくらいあったのでしょうか。

〔佐藤〕あのね、長持ちというのでしようか。タンスのようなものに、この位の(両手を広げながら)ものに、束になったものや巻いたものが入って

おりました。和田さんの話では、紙がくっついてしまっているの、一枚一枚離してからでないと見せられないということ、金光上人のものを探してくれと言つても、「これもそう

だべ、これもそうだべ」とちよいちよい持つて来てくれました。大泉寺さんは私よりもつと見ているはず

です。〔古賀〕和田さんの話しでは、当時、文書を写させてくれということ、多くの人が来て、ガラスの上に置いて、下からライトを照らして、模写されていたということでした。それらがあちこちに出回っているようです。

〔佐藤〕そういうことはあるかも知れませんが。金光上人史料も同じ様なものがたくさんありましたから。

〔古賀〕当時の関係者、福士貞蔵氏、奥田順蔵氏や開米智鑑さん等がお亡くなりになっていますので佐藤さん

の御証言は大変貴重なものです。”  
インタビューの数年後、偶然にもわたしは佐藤氏と拙宅近くで出会った。聞けば娘さんが上京区に住んでおられ、この時期は京都で同居しているとのこと。拙宅の近くだったので、日を改めて古田先生と挨拶にうかがった。そこには石塔山神社の収蔵庫で見たスフィックスの像があった。

### 三、西村俊一氏の聞き取り調査

わたしたちと一緒に和田家文書を調査した東京学芸大学教授の西村俊一氏(注⑧)も佐藤氏に聞き取り調査をしており、そのことを日本国際教育学会で発表している。報告集の關係部分を転載する(注⑨)。

「日本国際教育学会 一九九九年一月七日 第一〇回大会報告 (於) 京都・同志社大学

「日本国の原風景 ―『東日流外三郡誌』に関する一考察―」 西村俊一 (東京学芸大学)

(前略) 浄円寺佐藤堅瑞住職(元青森県仏教会々長)の証言

当方は、一九九九年(平成一一年)九月一九日、他の研究者数名と共に浄円寺(西津軽郡柏村大字桑野木田)に佐藤堅瑞住職(元青森県仏教会々

長)を訪ね、聞き取りを行った。彼は、和田喜八郎が資料を発見した当時の相談相手であった由であるが、大変穏和な人柄の宗教者であった。彼は、当時、「和田家資料」の中にそれまで知られていなかった『金光上人関係資料』が含まれていることを発見し、その譲渡を申し入れたが、和田喜八郎が応諾しないため、その模写版を作成してもらうこととした。これが、「和田家資料」の模写版作成の始まりであったとされる。

訪問当日、佐藤堅瑞は、和田喜八郎が新たに持参したという初見の「金光上人関係資料」三点を示しながら、「和田喜八郎に、この様なものは書けませんよ」と、その感懐を漏らした。その意味は、主に金光上人がしたためた他力信仰論の中身に関わるものと解されたが、その資料の中の一点はいわゆる模写版であった。しかし、彼は、そのことに頓着している様子は全くなかった。そして、「偽書」論者の代表とも言うべき安本美典について、「あの人は学者さんでしょう? それがどうしてあんな行動に走るのでしょうか。この世の中は、本当に怖いですねえ」という趣旨のことを、問わず語りに語った。

当方は、この聞き取りによって、自らの心証に一つの定かな裏付けを得た様に感じたことを、ここに明記し

ておきたい。(後略) ”

### 四、金子寛哉氏による調査

金光上人史料を調査した研究者に金子寛哉氏がいる。氏は『金光上人関係伝承資料集』(注⑩)の編著者。同書は浄土宗宗務庁教学局の発行で、浄土宗々門の公的な金光上人資料集として刊行されたもの。それには、佐藤氏や開米氏らによる金光上人研究の紹介もあり、興味深い見解が示されている。いわゆる偽作論者による浅薄で表面的な批判とは異なり、史料の分類や他史料との関係にも言及がなされ、学問研究としては比較的優れたものであった。その重要部分について紹介する。

金子氏は和田家文書に基づいて活字化された諸資料(『蓬田村史』第一章、『金光上人の研究』、『金光上人』)を紹介し、「平成になってからも新規発見を見るなど『和田文書』の全容は今なお不明であるが、『東日流外三郡誌』によってその存在がクロージアアップされる遙か以前に、金光上人関係『和田文書』資料は公開されている。このことは充分留意しておくべきであろう。」(一〇七六頁)と指摘する。

なかでも感心したのが、金子氏が和田喜八郎氏や佐藤堅瑞氏、開米智

鎧氏が住職をしていた五所川原飯詰の大泉寺を訪問し、金光上人関連和田家文書の実見調査(昭和六二年五月二八・二九日)と写真撮影を行い、それぞれを分類比較したことだ。現存史料の基礎的調査に基づいて史料批判を行う姿勢には共感を覚えた。金子氏は史料を次のように分類し、所見を述べている。

(A) 群 和田喜八郎氏が持参した記録物数点。薄墨にでも染めたかのような色を呈していた。

(B) 群 浄円寺所蔵の軸装した史料十本。『金光上人の研究』には収録されていない。

(C) 群 大泉寺に所蔵されている軸装史料、三七本。

(D) 群 北方新社版『東日流外三郡誌』(注⑩)の編者、藤本光幸氏より借用した史料(調査日は上記3群とは異なるようである)。一枚物が多いが、小間切れのものもかなり見られ、奇妙な香りと湿気を帯びたものがあった。藤本氏によれば、三十年以上も前からそうした状態だったとのこと。他群よりも(D)群の文書はより拙劣であり、誤字(誤記ではなく文字そのものの誤り)が多いことも目立つ。佐藤・開米両師とも、この(D)群資料をその著書に全く用いていない。



こうした分類と所見に基づき、計一五九資料を整理検討している。わたしの調査経験から判断すると、おそらく(A)(D)群は戦後模写本に属するものと思われる。この点、後述する。

## 五、偽作説を否定する金子所見

『金光上人関係伝承資料集』によれば、和田家文書一五九点を古文書の専門家に見せ、「あくまで写真で見たりという条件つきではあるが、古くとも江戸末期のものでしかない」との所見を得ている。金子氏は、現存する和田家文書が和田末吉らによる明治・大正写本であることをご存じなかったのかもしれない。従って、専門家の所見「古くとも江戸末期のもの」は妥当な判断だ。

さらに「他群よりも(D)群の文書はより拙劣であり、誤字(誤記ではない)文字そのものの誤りが多い」「佐藤堅瑞、開米智鑑両師とも、この(D)群資料をその著書に全く用いていない」とする所見も重要である。すなわち、戦後作成の模写と思われるものの文字は他群より稚拙であり、佐藤・開米両氏の著書には採用されていないということを示唆する。

(1) 戦後模写本と明治・大正写本とは筆者・筆跡が異なっている。

(2) 戦後早い時期に和田家文書と接した開米氏と佐藤氏が、著書に採用した和田家文書は戦後模写本ではなく、明治・大正写本であった。

この二点が金子氏の報告から読み取れるが、この指摘は戦後模写本と明治・大正写本とは筆者や筆跡が異なっていることを示唆しており、和田家文書偽作説を否定するものである。したがって、わたしは金子氏の調査報告を、「いわゆる偽作論者による浅薄で表面的な批判とは異なり、史料状況の分類や他史料との関係にも言及が見られ、学問研究としては比較的優れたもの」と評価したのである。金光上人史料一五九点を和田喜八郎氏や藤本光幸氏から借用し、写真撮影を行い調査分類した金子氏の証言だけに貴重ではあるまいか。

## 六、和田家文書研究の留意点

「薄墨にでも染めたかのような色を呈していた」という所見には、わたしも心当たりがあった。三十年ほど前に藤崎町の藤本邸にて、数十点程の和田家文書について、明治写本か戦後模写本か鑑定してほしいと藤本光幸氏から依頼された。

そのとき見た史料の多くは、厚めの紙を薄墨で古色処理したものであった。これはわたしが「群」と定義したもので、展示用に外部に提供された戦後模写本の特徴の一つであり、研究対象としては信頼性が劣る。というのも、元本通りに模写したのかどうか不明であり、内容を信頼してもよいのかわからないからだ。ちなみに偽作論者は展示用模写本の紙を戦後の紙と鑑定し、偽書の証拠としており、それは学問的批判とは言い難いものであった。

この他にもタイプが異なる「群」史料がある。それは新しい和紙に書かれた巻物で、筆跡は複数あり、明治写本とは様相が大きく異なる。わたしが実見したのは、高楯城展示室にあった巻物六巻、藤崎町撰取院所蔵の巻物などだ(書写者未詳)。こうした戦後模写本は明治・大正写本とは史料性格(作成目的、書写者、書写年代)が異なる。和田家文書研究にあたっては、これら「群」の存在に留意する必要がある。(令和六年(二〇二四)七月三〇日、筆了)

## (注)

- ①『東日流外三郡誌』の証言 ― 令和の和田家文書調査 ― 『東京古田会ニユース』二二三号、二〇二三年。
- ②永田富智氏(『北海道史』編纂委員)

の鑑定による。

- 「永田富智氏へのインタビュー」昭和四十六年『外三郡誌』二百冊を見た」『古田史学会報』一六号、一九九六年。
- ③開米智鑑『金光上人』一九六四年(昭和三十九年)の「序説」による。
- ④金光(一一五四―一二二七年)は浄土宗の僧侶。九州石垣(福岡県久留米市田主丸町)の出身。土地の訴訟で鎌倉へ来た際に法然の弟子安楽と出会い、法然に帰依して東北地方に念仏信仰を広めた。
- ⑤開米智鑑『金光上人』による。
- ⑥福士貞蔵編『飯詰村史』昭和二六年。編者「自序」には「昭和二四年霜月」とあり、編集は昭和二四年に終了していたようだ。昭和二二年夏に天井から落下した和田家文書「飯詰町諸翁聞取帳」は、その翌日に福士氏にもたらされている(和田喜八郎氏談)。
- ⑦佐藤堅瑞『殉教の聖者 東奥念仏の始祖 金光上人の研究』一九六〇年(昭和三五年)。
- ⑧西村俊一(一九四一―二〇一七)。元東京学芸大学教授。国際教育学を専門とし、日本国際教育学会々長を歴任。安藤昌益研究に造詣が深い。
- ⑨「日本国の原風景 ― 『東日流外三郡誌』に関する一考察 ―」『北東北郷村研究』第七、八号、北東北郷村教育学院、二〇〇〇年。
- ⑩『金光上人関係伝承資料集』金光上

人関係伝承資料集刊行会発行、一九九九年(平成十一年)。

⑪『東日流外三郡誌』北方新社版(全六冊) 小館衷三・藤本光幸編、一九八三〜一九八五年(昭和五八〜六〇年)。後に「補巻」一九八六年(昭和六一年)を発行。

## 和田家文書備忘録8 金寶壽鍛冶の刀 東京都港区 安彦克己

今年7月9日東京新聞に、静嘉堂文庫美術館で「鎌倉時代の名刀に学ぶ」日本刀展を紹介する記事が載った。「同じ重文の太刀でも『奥州宝寿』が反りが大きく豪快な印象…」とある。

当会は1999年10月、「日高見国の製鐵遺跡を巡る」旅行を実施し、道中田中巖会長(当時)から製鉄のいろはを学びながら一関市舞草神社、砂鉄川たたら製鐵学習館、尾崎半島の尾崎神社本宮、釜石市立鐵の博物館、宮古市山田などを巡った。

最後は安倍貞任、宗任らの弟五郎正任の末裔で、前九年の役に敗れ一族郎党十七名が黒沢尻柵から遠野を経てこの石到下の地に住み着き、豊間根を名乗り、ちょうど50代目に

当たると当主・信(まこと)さんから同家の歴史をうかがった。現在も正任と同行した譜代の家臣が周辺に住んでおられるとのこと、平安期の安倍一族の歴史が今に残っているのに驚いた。

「防火のため漆喰で固めた蔵には先祖伝来の日本刀が10数本あったが、某岩手県知事が『鑑定する』と借り出し、それつきり戻ってこない」とのお話には、一同の中から「訴えないのですか」の声が挙がった。和田家文書にある舞草刀の名工金寶壽(ともなが)が魂魄込めて鍛造し、銘に天國・天座(あまくら)あるいは寶壽とある名刀ではなかっただろうか。

『和田家文書』の金寶壽関係の史料五本を挙げる。(文中省略あり)

**史料1** 天慶己亥(876)年。(略)將門は石井に館を築き、奥州の舞草鍛冶を入れて討物を備へたり。時の名刀に天國・天座の銘あるは是なり。

(▼北鑑 第50巻 十三)

**史料2** 舞草鍛冶は砂鐵川の採鐵にて刃金とす。代々金寶壽家に秘傳とせる、奥州唯一の名刀たり。刀工は代々寶壽を襲名して、是を鍊えたり。(略) 刀身二尺五寸乃至二尺三寸五分に造り、もと反りにて直刃多くも、安倍氏直屬になりけるより大波刃・雲流刃に仕上たり。金氏はア

ルタイのシキタイ騎馬族の系にて、高麗仕官に王屬となりしも寶壽、日本國に望みて歸化す。(注1)

(▼北鑑 第24巻 六)

**史料3** 火入れなして諸鍛冶に造られきは農具・討物・馬具。諸道具を造商たる利益なり。なかんずく刀劍の金寶壽と曰ふ鍛冶になるは銘に天國・天座の刻字ありて、世に是を舞草刀とて武士等の頂寶たり。

金寶壽とは、きんのともながと讀みて正しきなり。刀銘は無銘ぞ多く、銘を入れるはまれなり。寶壽・天國・天座と刻むあり。(略) 刃金に用ふは砂鐵川の砂鐵及び石井鐵・流星隕鐵(注2)を用ひたり。日本將軍が太刀のみ天國の銘を刻み、小刀に天坐と刻むは安倍家代々の寶刀たり。(▼北鑑 第39巻 三)

**史料4** 凡そ奥州の鍛冶師の多くは前九年・後三年の役及び平泉の乱にて相模に連ゆれたり、と曰ふなり。

(略) 安倍一族ことごとく寶壽を好みたりと曰ふ。

源義家が安倍宗任より召上たる刀、是を源氏が重代の寶刀とし、髭斬丸・膝丸と名付け、鶴岡八幡宮に神の劍とて奉寄せり。後、頼朝是を帶刀として今見ること能はざるなり。風聞傳にては、失刀せりとも曰ふ。相模鍛冶となりし奥州鍛冶は備前にも移されきに、刀劍に相模刀・備前長

舟刀の名を今に遺したり。(注2) 然るに奥州にての舞草刀にては、鍛法是を抜くはなし。

寛政五年八月七日 金義幸

(▼北斗抄2 四)

**史料5** 貞任は敗兆を覚りて(略)戦起の二十日前に落忍ばしむ。乳母・中一の前にいだかれし高星丸、しばし父貞任に今生の惜別をなしかけるも、無心なる高星丸聲挙げて笑ひけるを、貞任遺言す。星丸よ、大なれよ。末代に安倍一族の驚とならめ。亦、饕餮となりて邪道の侵魔を滅せよ。とて楓の如き手に、己が愛刀寶壽の太刀を握らせしに、近臣みな涙せりと今に傳へなむ。

文政戊寅年六月一日 藤井伊勢  
(東日流六郡誌 全説) 一、安倍春秋録

以上の史料だけでも寶壽銘の太刀は安倍氏重代の宝刀であったとわかる。(全史料は十指に余る)

では静嘉堂文庫に展示されている『奥州宝寿』を見てみよう。

説明文には「奥州太刀 銘寶壽」とあり「ほうじゅ」のルビがあり、「鎌倉時代 刃長77・6センチ。反り3・8センチ」「古来戦乱の地であった奥州では、鍛刀技術が発達し、多くの刀工が輩出した。刀劍書には平安期の奥州鍛冶の名が多く記されているが、古い現存作は皆無に近く、鎌倉



期以降のもので占められる。寶壽は月山と並び奥州鍛冶を代表する一派で平泉に住した。(略) 本作は素朴で



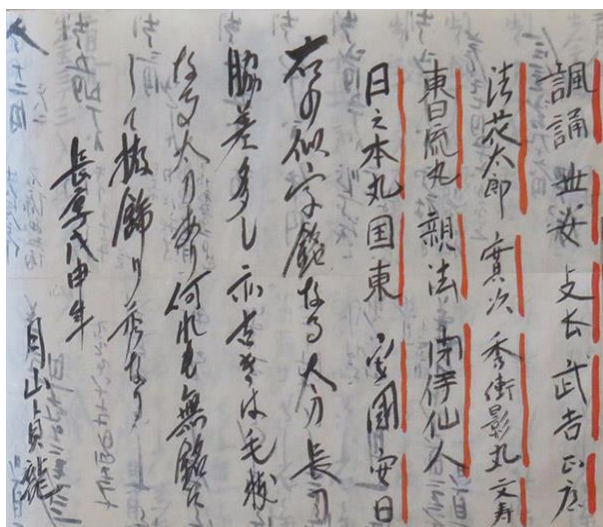
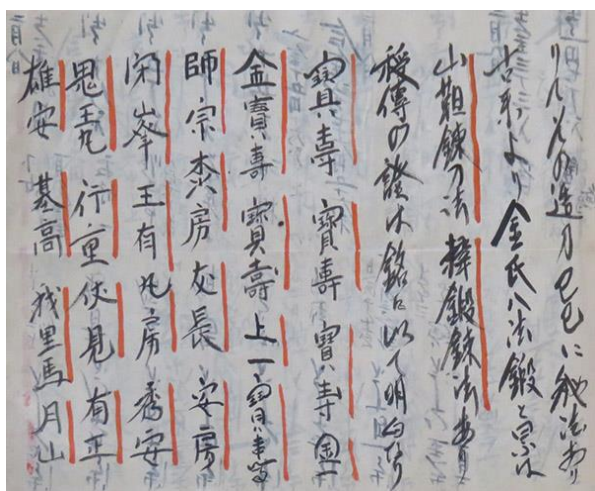
寶壽

野趣が横溢した作風である。」とある。展示中の刀の中で、「宝寿」は重ね(かさね)肉厚が厚く、反りも大きく、刃長は2尺5寸6分とあり史料2と一致する。全体の姿は説明文が記するように「豪快」である。中心(なかご)に彫られた銘も寶壽と読める。また「は月山と並び奥州鍛冶を代表する」とある。

『和田家文書』には月山貞龍が記したとする史料がある。

#### 史料6 「舞草錬法鍛冶」

永承戊子(1088)年、安倍日本將軍賴良、世情にわかに急を告ぐ、討物馬具三萬騎を領職に布令す。舞草と曰ふ刀鍛冶ありて、安倍氏代々の刀工な



り。

祖は金氏の胤にて代々を襲名し、きんのともひさと稱したり。依て、刀銘に寶壽を刻むなり。陸羽の鍛冶五十六郡に涉り(右の写本はここから読める)てその造刀、己己に秘法あり。

古来より金氏八法鍛と曰ふは山鉦錬刀法・韓鍛錬法あり。授傳の證は銘に以て明白なり。

寶壽、寶壽、寶口、金一、金口、寶

壽、上一、寶口、師宗、棗房、友長、

安房、閉峯、王有、丸房、秀安、鬼王

丸、行重、伏見、有正、雄安、基高、

杓里馬、月山、

諷誦、世女、支口、武吉、正廣、法花

太郎、實次、秀衡影丸、文壽、東日流

丸、親法、閉伊仙人、日之本丸、国東、

安國、安日

右の似字銘なる太刀・長刀・脇差、多し。亦古きは毛抜なる太刀あり。何れも無銘にして拵飾り秀なり。

長享戊申(1488)年 月山貞龍

(丑寅日本雜記全)

ここに列挙された刀銘に日之本丸、国東、安國、安日など陸奥の舞草刀ならではの銘が並ぶ。

また、寶壽を「ともひさ」と称すところあり、「ともなが」に統一されていない史料状況から、個々の史料が独自に記されていることを示している。

ネットで月山銘の刀剣を引いた。

(大要)

「出羽国月山の霊場に住んだ鬼王丸を元祖とする。月山の麓では刀鍛冶が栄え、軍勝、寛安、近則、久利などの名人を輩出し、江戸期には途絶えた。幕末、月山弥八郎貞吉は大坂に移住し、以来、月山家は関西を拠点とした。明治以降は、弥八郎貞吉の養子の弥五郎貞一(初代貞一)は宮内省御用刀匠となる。長男月山貞勝や孫の月山貞一は人間国宝。当代は、月山貞利。その長男貞伸も作刀活動に入る。」とある。

ここから、月山鍛冶の名前には貞吉・貞一・貞勝など「貞」を世襲していると思われる。記録者も月山貞龍であり、この史料も上記史料同様、刀剣の史料として貴重ではないだろうか。



静嘉堂文庫には「寶壽に関する史料はない」とお聞きした。後日『和田家文書』から抽出した史料集を若い学芸員Y氏にお届けした。目を通してから真顔で「面白いですね。参考にさせていただきます」と。『和田家文書』が龍門の急流を登っていく姿を見た思いがした。

（注1）『人類の起源』篠田謙一著 中公新書 2023年2月 168頁に

「鉄器時代に当たる紀元前八世紀から前二世紀にかけてこの地域（中央アジア―筆者）を支配した遊牧騎馬民族スキタイは、…」

とある。後日『和田家文書』から「シキタイ」を抽出し、製鉄の文化がバイカル湖、黒龍江を経て列島北部へ伝播した歴史を報告したい。

（注2）石井は将門の本館、岩井。『和田家文書』では下野庚申山に隕石が落着し、将門は鉄塊を見つけ太刀にしたとする史料が載る。（北鑑 第二巻 坂東丑寅之雜記）

（注3）ウキペディアによると、「武士の時代が来て刀剣の需要が急増したこと、源頼朝は大和や山城、備前、舞草鍛冶などに、作刀を依頼したのち北条時頼（二代執権）は他国から著名な刀工を家族ごと鎌倉に招聘、山城伝の栗田口国綱、備前伝の三郎国宗などが鎌倉で活躍した」とある。

史料にある「相模鍛冶となりし奥州鍛冶は備前にも移され、…相模刀・備前長舟刀の名を今に遺したり」とする渡り刀鍛冶に関するこの史料も貴重な史料であろう。

### 「東京古田会」月例会報告⑦ ※文責：新保 高之

【第一部】の進行役は事務局長の斎藤、【第二部】の進行と説明・解説は幹事の新保。

●二〇二四年六月度（二九日） 堀留町区民館にて、参加者は会場十五名、リモート十一名。

#### 【第一部】

一・研究発表… 研究発表二件はいずれも東京古田会ニュース「二一六号」に掲載。

A「大宮姫伝承を訪ねて」（村田智加子氏）（1）発表内容…大宮姫伝承に関わる①牟瀬浜と②揖宿神社、豊玉姫に関わる③豊玉姫神社を中心に画像を使って解説。自身の推察も披露。（2）質疑等…①旅の動機は、古田史学論集第二十二集中の正木裕氏論稿「大宮姫と倭姫王・薩末姫」。②天智天皇の陵墓や葬礼に関する記事がないのは、『日本書紀』の大きな謎等。（発表・質疑六〇分）

B『和田家文書と国東半島』の旅に参加して」（讃井優子氏）（1）発表内容…①安倍・安東氏が国東半島に残した足跡を見る、②北方ステツブロードと古代新羅と宇佐と渡来人の信仰を考える、③「東北安倍氏」と

「新羅系渡来人の末裔」とその交流について考察する、との三点。これらの要点について、関係する人物の紹介を経て旅行の行程を丁寧にとどりながら、画像を交えて丁寧に説明。

（2）質疑等…元々の国東は東と西に分かれていた等、安彦会長から適宜に解説があった。（発表・質疑四五分）二・懇談会…①発表関連で、安東家の新家紋「檜扇に違い鷲の羽」、②「秋季旅行会」の立案開始。（五分）

#### 【第二部】

※残念なことに、開始時にリモート参加者との映像共有の不具合が発生。

一・勉強会「古田武彦『失われた九州王朝』その七」（1）対象…第五章隣国史料にみる九州王朝 第一節「九州王朝の黄昏」。（2）当該節の要旨…①舒明紀の百濟人質・豊璋記事の紀年錯誤や②天智・持統紀の薩夜麻関連記事などを取り上げ、『書紀』批判をしつつ、白村江の戦を契機に弱体化する九州王朝について論述。

さらに、③九州王朝について残された問題五項目について解説。（3）質疑等…①『三國史記』新羅本紀での

倭国↓日本国切替え記事等は『新旧唐書』に依拠。②『続日本紀』で孝謙天皇を高野天皇呼ぶのは東北地方の蝦夷と関連か、等。（解説・質疑四〇分）

二・読書会「岩波文庫『日本書紀』天武天皇紀下その七」（1）対象範囲…天武十三年条。（2）内容…①宇治谷孟編の現代語訳を基に記事朗読、②該当・留意事項を抽出説明、③主要記事は、都候補地の視察、軍備や服装に関する事項制定、「八色の姓」制定、大地震の発生、等。④トピックとして「外交記事に出てくる「大使」「副使」「小使」。（3）質疑等…この時期に地震が頻発したことに関連して、『続日本紀』に限定された時期に山火事・地震が頻発したとの記事があり、天武紀のこれら記事も信憑性がある。（解説・質疑四五分）

●二〇二四年七月度（二七日） 明石町区民館にて、参加者は会場十七名、リモート十一名。

#### 【第一部】

一・研究発表「宇治橋断碑をめぐる」（藤田隆一氏）（1）趣旨…「寛政三年（一七九一）に頭部（碑全体の三分の一、二七文字）が発見された当該断碑について、氏は「年号を多角的に取り扱って欲しい」と。（2）内容…

①現存の当該碑は復元されたもので、

『帝王編年記』に全文が遺る。②この石碑に関する『日本書紀』中近世の文献資料を多数提示して断碑の来歴と碑文を説明。③碑文は「道登が大化二年（丙午歳〓六四六）に宇治橋を構え立てた」とするが、『続日本紀』文武四年（七〇〇）条には「道昭が山背国宇治橋を創造した」とある。一方、九州年号の大化二年（六九六）とは造橋年次に五〇年のズレ。④人名や年次のズレの問題をどう解決するかが論点になる。③質疑応答など…活発な意見等があった。関連資料を多数収録された努力に敬意を表する。（発表・質疑九〇分）。

二・懇談会…①「古田史学の会」と「多元」が共催で創立30周年記念講演会を予定、②新HPへの要望、③『新旧唐書』の漢文解釈関連、等。（二五分）

## 【第2部】

一・勉強会「古田武彦『失われた九州王朝』その八」（1）対象は、第五章 隣国史料にみる九州王朝 第二節（二つの金石文）の《人物画像鏡》。

（2）要点…隅田八幡宮の「人物画像鏡」に関する通説や問題点を検証し、この鏡は百済武寧王が五〇三年に九州倭王「年」に贈呈したもの。（3）

論点…①従来の学説（福山・水野・井上）を紹介・解説しつつ問題点を指摘。②古田先生の論証（十四項目について

て論証し、最後に自身の考察と解釈を述べている。（4）質疑等…二〇一五年十月度月例会での川上英一氏【思想としての「国宝人物画像鏡」—古代史学との対話】（氏による同名の私家本あり）発表（当該鏡の作成年代は「江戸時代後期」とする）が紹介され、「日十大王」の読みを含め活発な意見交換があった。（解説・質疑四〇分）

二・読書会「岩波文庫『日本書紀』天武天皇紀下その八」（1）対象範囲…天武十四年条。（2）内容…①宇治谷孟編の現代語訳を基に同年記事の朗読、②該当・留意事項を抽出し説明、③主要記事…爵位名と階級増の改定、朝服の色制定、京と畿内で大夫の武器を検校、各地に使者を派遣し国司・郡司と人民の状況を巡察、等。④トピックとして「天武紀下の「天文・気象現象に関する記事」。（3）質疑等…①賀正礼と②東海・筑紫への使者派遣・巡察記事の背景に、九州王朝存在が見える。※古賀達也氏の指摘。（解説・質疑四〇分）

## お知らせ

### 【新入会員募集】

東京古田会は新規会員を常時募集しています。古田武彦や古代史に興味のある方、どうぞお気軽にお問合せ下さい。また、入会ご希望の方や、

本会にご興味のある知人・友人の方をご紹介ください。入会希望の方は事務局に電話又はメールで住所・氏名等ご連絡ください。年会費は4千円になります。

## 月例会のご案内

【10月26日（土）】

午後1時〜5時、会場未定

### 【第1部】

\* 研究発表 ディスカッション  
・テーマ…古田武彦『九州王朝の歴史学』第4篇「新唐書日本伝の史料批判」  
—旧唐書との対照 司会・橋高修氏

新・旧の両唐書間における倭と日本の併合関係は逆転しているのか？古代史研究者の間でも決着していない矛盾点の整理、古代史セミナー2024にも通ずるテーマです。9月例会でレジュメ配布、たくさんの方の参加をお待ち致します。

### 【第2部】

新保高之氏

\* 勉強会 「古田武彦『失われた九州王朝』まとめ

\* 読書会 日本書紀を読む  
天武天皇紀 まとめ

・資料は用意いたします。

【11月30日（土）】

\* 研究発表…「古田武彦記念古代史セミナー2024」報告会

\* 司会・橋高修氏

### 【第2部】

新保高之氏

\* 勉強会 「古田武彦著作集から」

\* 読書会 日本書紀を読む

・資料は用意いたします。  
参加費500円

当日会場にてお支払ください。

● 月例会会場は10月11月とも未定ですが、順次決まり次第HPにてお知らせしますので、ご確認下さい。

● 会場参加費は500円です。

● オンライン参加できます。（無料）

### 【和田家文書研究会】

11月は休会です。次回は来年、1月11日（土）午後2時から

● 「東京古田会ニュース」原稿募集！

東京古田会ニュースへ掲載する論文・小論・古代史雑感などを募集しています。住所・氏名を必ず明記のうえ、500字から5,000字程度にまとめ、Eメールにて左記へお送りください。ただし、特定個人への中傷や古代史と無関係な場合は掲載をお断りすることがあります。予めご了承ください。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。（Eメールアドレス）  
saitaka7078@yahoo.co.jp

川崎市 斎藤隆雄迄